

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」ともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。  
読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

#### 大学入学共通テスト英語におけるイギリス英語の使用について（令和元年8月23日）

現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

本部会では上記の方針を踏まえ、高等学校卒業段階で到達すべき英語力を公正かつ正確に測定する問題作成に向けての検討を継続的に行ってきた。令和4年度共通テストについては、平成29年度試行調査（プレテスト）及び平成30年度試行調査（プレテスト）、また令和3年度共通テストの結果も踏まえ、問題形式や内容を分析し、各大問で測るべき言語能力を検証した上で、各大問で測るべき能力を様々な方法で問うことができるよう配慮した。また、実際のコミュニケーションを重視するという観点から、問題の指示文等も英語とした。

第2問のような概要や要点を把握することに加えて、推測したり、事実と意見を整理したりしな

がら読む問題、第3問のようなイラストや写真などの視覚情報を参考にして、概要・展開を把握する問題、第4問のような複数の情報を読み取り、論理の展開や書き手の意図を把握する問題など、思考力・判断力・表現力等を測れるような問題作成を工夫した。また、試験全体を第1問～第6問の六つの大問で構成することを継承し、セクション数（中間）は10、総設問数48、配点2～3点という構成内容で出題した。本年度の受験者数は480,763人で、昨年度実施した大学入学共通テストの「英語（リーディング）」受験者数476,174人より若干増加し、例年同様に全科目中で最も多かった。平均点は昨年度の「英語（リーディング）」58.80点（100点満点）よりやや高い61.80点（100点満点）であった。標準偏差は20.30で、受験者の得点幅広い範囲で分散していた。、難易度及び得点状況の観点から今回の試験はおおむね適切なレベルであったと言える。また、試験の信頼性、受験者の能力を識別する識別力も非常に高く、全体的にバランスの良い標準的な問題であった。

第1問 Aは、クラブ活動の一環として、料理本からブラジルの果物について必要な情報を読み取る問題である。問1は、4つの果物のうち2つの共通点、また問2はsour cakeを作るのに最適な果物を特定する問題である。昨年度はソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）での双方向型の英文に基づく出題だったが、今回は複数の箇条書きの情報を比較・整理しながら、目的に合った情報を探し読みすることを想定する出題とした。Bは、キリンの赤ちゃんの名づけコンテストに関するウェブサイト上の平易な英文から、必要とする情報を読み取る問題である。いずれの問いにおいても、選択肢が英文中の語から言い換えられており、単に選択肢の英語を英文の中から探すような読みでは正解にたどり着けない問題である。

第2問 Aは、英国で実施するサマープログラム参加者に配布された大学図書館利用案内を読み、概要や要点を捉えたり、推測したり、事実や意見を整理したりする問題である。問1は図書館の使い方のポイントの把握、問2から問4は、生徒自身がこの図書館を使うことを想定し、読み取った内容を活用することを想定している。問5は事実と意見の整理を問うものであるが、選択肢の記述内容が事実か意見かだけでなく、条件に合っているかの見極めを要する出題内容である。Bは、平易な英語で書かれたペットに関する学校新聞の記事を読み、概要や要点を捉えたり、推測したり、事実と意見を整理したりする問題である。問1はペットの保有率が多い順に3か国を並べ替えるもので、数や比較の表現の正確な読み取りを要する。問2、問3、問5はアンケート結果の概要や要点に関するもので、記事に合うタイトルを選ぶなど、思考を要する内容であった。また問4は条件に合う意見を選ばせる問題で、事実と意見を意識しながら読むだけでなく、日本のペット事情に関するDavidの論点の把握が必要となる。昨年度に引き続きA、B共にイギリス英語を用いたが、違和感なく読めたものと思われる。また、共に十分な識別力を持った問題であった。

第3問 Aは、海外で開催された日本文化に関するイベントに参加したイギリス人によるブログの平易な英語を読み、その概要を把握する問題である。そのイベント内容の図示も参考にしつつ英文の記述内容を把握し、条件をあてはめたり作者の心情を読み取ったりするなど、本文をしっかり読みこまなければならない。Bは、24時間以内に英国3州の最高峰に登頂することを目的としたThree Peaks Challengeに関する平易な英文の記事を読み、概要や要点を捉える問題である。問1と問2では、出来事が起きた順番や途中で遅れが出た理由を問う、問3では、この記事から読み取れることを問うている。A、B共にイギリス英語を用いている。また、共に正答率は高くはないが、特にBの問1は識別力が高い問題であった。

第4問 米国の大学に入学する学生が、2名の学生が書いた電化製品に関するブログを読み、各ブログで提示される電化製品の価格表（図表）を参照しながら、自分が必要とする情報を読み取り、

論理の展開や書き手の意図を把握する問題である。問1～問3では、各ブログの論点や両者の共通点を理解してそれらを頭の中で整理し、また問4、問5では、購入者が学生であることや各店での電化製品の保証内容などの条件を考慮して正解を考えなければならない。問5では、このような前提条件を考慮できているか否かで差がつく結果となった。

第5問 電子テレビジョンを発明した米国のPhilo Farnsworthについての、平易な英語で書かれた物語を読んで、その概要や要点を発表用ポスターにまとめる問題である。問1ではこの記事概要から副題として最も適切なものを選び、問2ではこの物語初期に起こったことをていねいに整理し、問3では、テレビジョンの発明に関連する項目を時系列に並べることを求めることで物語の展開の理解度を問う内容となった。総じて、識別力が高かった。

第6問 身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する記事やレポート、資料などの英文を読んで文章の論理展開を把握したり、概要や要点、情報を整理したり、要約する力を問う問題である。Aは、参加している勉強グループで、出生時刻が夜型と朝型のいずれになるかを決める要素となることを示す本文内容をまとめるノート作成の場面である。与えられたメモを完成するうえでは、文章全体の論理展開を考えたり、概要を把握したりする力が求められる。Bは、チームで科学コンテスト用の発表ポスターを作成中で、環境保護のためにできることとしてリサイクルのシンボルに関連する7種類のプラスチックの特徴やリサイクルのしやすさなどを相対的に比較する英文である。この7つの素材を、人体にとって比較的安全とされるものと、ある条件下では取り扱いに注意が必要となるものの2グループに分けて論じている。この7種のプラスチックを比較対照することで概要・要点や論理展開を把握する力、そして要約の力を問う問題である。問1はプラスチック・リサイクルのシンボルマークの意味合いを読み取るもので、問2は素材2つの特徴を問うもの、問3はこの7つをより俯瞰的にまとめ、素材間の類似点・相違点を本文全体から読み取る必要があるため、深い読みが求められる。第6問の識別力も十分に高かった。

### 3 出題に対する反響・意見についての見解

各方面からはおおむね肯定的なコメントが得られた。特に高等学校教科担当教員（以下「高校教員」という。）からは、「高等学校段階での『読むこと』の領域の学習成果を測るものとしておおむね適切であった。」「高等学校段階で学習した語彙や文法の正しい知識を基に、目的に応じて英文を読み、思考力・判断力・表現力等を発揮しながら概要や要点を捉えたり話の流れを整理したりする必要性のある内容であった。」「幅広い受験者層に対応する難易度の高い問題がバランス良く配置されている。」「環境問題を切り口として、教科横断的な内容を扱っている点が評価できる。」など、高い評価を得た。

また、教育研究団体からは、第2問Aについて「今年は情報が1つの“handout”にコンパクトにまとめられ、非常に分かりやすく改善された」、また第5問では、試行調査で出題された正答選択肢の数が特定されていない問題形式がなくなったことにより「受験者にとっては安心して問題を解くことができるようになった」など、テストの取り組みやすさの向上について評価を得た。また、同じく教育研究団体からは第2問Bについて『『事実』と『意見』の区別がわかりやすく改善された』との評価を得た。これらはいずれも問いかたを工夫したところであり、より妥当性の高い出題ができたのではないかと考えている。

高等学校における英語授業とのつながりに関しては、高校教員から第2問Bについては「調べたことを新聞などの記事にまとめる活動の参考になる良い題材である。」、第5問については「目的に応じた読み方を受験者に求める問題は、高等学校の指導の参考になるものである。」、また第6問Aについては「要約のメモの形式が、語彙の確認から始まって、要点、詳細という流れになってお

り、まとめ方のアイデアを与えてくれるものになっている。」など、今後の授業への良い意味での波及効果を示唆するコメントが寄せられた。

一方で、高校教員と教育研究団体の双方から、第3問Aについては問題数が2問のみであり、設問数が少ないのではとの指摘を受けた。これは各問題で問う内容にも関係するところであり、たとえ限られた問題数でも本文の本質的な読みを促すことができるよう今後も工夫していきたい。また、一昨年度までのセンター試験、また昨年度の共通テスト問題と比べても英文量が増えていることなどから、情報操作能力を測っているのではないかと指摘に対しては、昨年度と同様に設計上の違いがあることを記しておきたい。日常生活においては、目的に応じた読み方が求められる。例えば情報を探し読みしたり、インターネットで調べものをしたりする場合には、英文を一字一句読むのではなく、必要な情報を短時間で把握することが必要となる。またペーパーバックや新聞などを読んで楽しむ場合でも、一定のスピードが必要なことは変わらない。本テストでは、それぞれのタスクに応じたスピードで英語を理解することを念頭に、実践的なコミュニケーション場面において「その場で読み取る」能力の測定をしていることを今一度強調したい。

#### 4 ま と め

センター試験の「英語（筆記）」同様、「英語（リーディング）」は、全科目の中で最も多くの受験者が受験する科目であり、各方面からの関心が高い。特に、共通テストにおいては、平成21年告示高等学校学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、「英語（リーディング）」は、大学教育の基礎力となる知識・技能の理解を問うのみならず、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことを重視し、一方で大問ごとにA1からB1まで難易度を設定し、幅広い受験者層に対応できる問題構成としている。昨年度と同様に平均点の分布はなだらかで広く、各設問は高い識別力があることも示された。各大問の指示文では、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況を設定し、より現実的な場面に即したリーディング問題となったと考える。

リーディングは、たくさんの情報をより多く頭に入れるのではなく、それらの情報を頭の中で整理して深く理解し、必要に応じて考え、活用することである。また、テストにおいてたとえ同じ力を測る場合でも、その方法は多岐にわたる。受験者には日ごろから様々なタイプの英文に触れ、目的や場面に応じた問いかけに柔軟に対応できるリーディングの力をつけることを意識してほしい。本問題作成部会のような理念が教育現場に良い影響をもたらし、英語のコミュニケーション能力育成に役立てることができれば幸いである。